



はたけの家

24時間の医療ケアが必要な3人を含む重度の障害をもつ35～27歳の男女4人が住む家である。事業主体は住人のひとりの女性が代表するNPO法人、その父親Mさんが実質の運営者である。彼らの暮らしは常に家族介護がベースで成立している。日中は通所施設を利用するも家族の負担は大きく、介護者である親の高齢化と共にここにも親なき後の課題がある。

建物はMさん所有の築後45年を経る木造平屋住居。これをNPOが借家して運営する。制度利用の魅力はあるがさまざまな制約の面からあえて「施設」を選択しなかった。増改築が繰り返されたこの建物は構造が複雑で、計画段階より大工と協議をしながら進めた。このプロジェクトの根幹は「地域の支援」とその「継続のしくみづくり」にある。Mさんはこの事業の始動に際し、小さな催しを企画し、地域の人たちを含め60人が集まり賑わった。その中の近隣住人数人が世話人として日中食事の支援に訪れるようになる。建物中央に位置するLDKが、住人4人とそれぞれをサポートするヘルパー、看護師、世話人と家族の団らんの場となっている。この場に関わる人たちが自然と語らい食事を共にするなど、4人の若者を中心とした大家族という雰囲気ができはじめている。所属の異なるヘルパーや看護師たちの情報交換の場、ケアの人材を育てる場ともなっている。重い障害をもつ人が地域で持続的に暮らすひとつの形、親なき後への安心につながる可能性を感じさせる。

1 正面外観 2 居間での団らん 3 玄関